

批判的リテラシー研究の動向とその意義

岩 槻 知 也

(初等教育学科助教授)

1. はじめに

2000年及び2003年に実施された OECD の PISA 調査 (Programme for International Student Assessment: 生徒の学習到達度調査) は、測定の対象となる生徒の能力を「読解力 (reading literacy)」「数学的リテラシー (mathematical literacy)」「科学的リテラシー (scientific literacy)」と規定し、それらが学校カリキュラムにおいて獲得される知識の量を指す概念とは異なるものであることを強調した。そのため、この調査で用いられた問題は、知識の内容そのものを問うだけでなく、習得した知識を社会生活における様々な状況にいかに関用するかを問う、いわば判断力や応用力、問題解決能力をも測るものとなっている (国立教育政策研究所, 2002・2004)。この単純な「読み書き能力」という意味を超えた PISA 調査のリテラシー概念は、本調査の参加国でもあり「学力低下論争」の喧しい日本においても注目され、例えば2003年には日本教育学会が、その機関誌『教育学研究』において「公教育とリテラシー」と題する特集を二度にわたって組むに至っている (日本教育学会, 2003. 9・2003. 12)。

以上のように「リテラシー」は、近年国際的にも、また国内的にも教育界における重要なキーワードの一つとなり、その内容に関する研究が様々な分野で展開されてきている。なかでも標題に掲げた「批判的リテラシー (critical literacy)」の研究は、先の PISA 調査が示したような単純な「読み書き能力」や学校のカリキュラムをベースとする「学力」とは異なるリテラシー概念を考えるうえで、極めて示唆的な問題

提起を行ってきた。ブラジルにおける自身の実践に基づいて独自の識字教育理論を構築した Paulo Freire の研究に端を発するこの批判的リテラシー研究は、例えば1980年代のアメリカ教育界におけるリテラシー論争を惹起した火種の一つにもなっているのである。

そこで本稿では、このような批判的リテラシー研究の歴史と現状を概観することによって、それがリテラシーの捉え方に与えた影響を明らかにするとともに、特に成人識字教育の方法研究に対して示唆するものについて検討を加えてみたい。

2. 批判的リテラシー研究の歴史

(1) 批判的リテラシー研究の源流— Paulo Freire の識字教育論

管見の限り、「批判的リテラシー」という語の初出については定かでない。しかし後に言及する批判的リテラシーの提唱者によれば、この語は、1950年代の半ば以降、ブラジルをはじめとする世界各地で「被抑圧者」を中心に独自の識字教育を展開し、その方法を体系化した Paulo Freire の理論に依拠しているということである (Giroux, 1987; McLaren, 1988; Lankshear and McLaren, 1993)。周知の通り、Freire は教育学全般、ひいては教育学の領域にとどまらない膨大な業績を残しているが、ここではその識字教育に関わる基本概念として「意識化 (conscientization)」を、またその方法論として「生成語 (generative word)」の抽出と「コード表示 (codification)」をとりあげてみたい。

まず「意識化」について、Freire (1970a) は

次のように述べている。

状況性 (situationality) を省察することは、存在条件そのものを省察することである。つまり批判的思考をとおして人間は、状況のなかで、生きていることを互いに発見するのである。この状況がもはや人を封じ込める不透明な現実、あるいは人を苦しめる袋小路であることをやめ、人間がその状況を客観的課題状況として把握できるようになる、そのときになってはじめて、積極的関与が可能となるのである。人間はその埋没状態から脱却する。そして現実のヴェールがはがされるにつれて、そこに介入する能力を獲得する。現実への介入は、歴史的自覚にほかならず、脱却からの一歩前進を意味している。それは状況の意識化の所産である。意識化とは、脱却のさいに必ずみられる自覚的姿勢の深化である (Freire, 1970a, 邦訳, 131頁)。

ここでいう「状況性」とは、自分が状況のなかで生きているということ、すなわち「自分が時間—空間条件のなかに根ざしているということ (Ibid., 邦訳, 130頁)」を意味している。ブラジルにおける Freire の識字教育実践に即していえば、大土地所有制のもと少数地主の収奪に苦しむ農民が、その抑圧の現実に埋没して生きているという、その状況である。Freire によれば、このような状況性の批判的な省察 (critical reflection) を通じて、人は自分の置かれている状況を客観的に把握できるという。つまりこの過程こそが「埋没状態からの脱却」、言い換えれば「状況の意識化」の過程なのである。

以上のような意識化の過程を生み出す識字教育の第一段階として、Freire は「生成語」の抽出を重視している。この生成語とは、端的に言えば、識字教育の対象となる地域住民が日常生活で使っていることばである。したがって識字教育の提供者は、プログラム実施の前段階において対象となる地域に入り込み、その地域の住民と対話することによって、そこにある典型的な言い回しや住民の不満、希望などを把握し

ておかねばならない。また「コード表示」とは、生成語の内容に関連した典型的な日常生活の場面を絵で表示したものである。プログラム参加者はこの絵表示をもとに提供者や他の参加者と対話することを通して、その対象となっている日常の場面から距離をとることを経験する。つまり「コード表示」は、現実の生活を理論的脈絡のなかに据えて認識の対象へと変換させる機能をもつ。そしてこの表示に基づいた具体的現実の分析をしつづけた後に「生成語」が初めて参加者に視覚化されるのである (Freire, 1970b, 邦訳, 107-125頁)。したがってこのような方法論に立脚するならば、識字教育のプロセスにおいて文字の読み書き技能の習得は二義的なものとなる。つまり最も重要なのは、あくまでも学習者の置かれている状況、具体的現実であり、その学習者自身による自覚なのである。

(2) アメリカにおけるリテラシー論争

以上のように、学習者自身の置かれている状況を重視し、その状況に根ざしたりテラシーを学習の資源とする Freire の識字教育論は、'80年代のアメリカ教育界におけるリテラシー論争の重要な理論的基盤となる。ここではその論争の契機となった'80年代の教育改革の流れと「文化リテラシー (cultural literacy)」論の内容、及び Freire 理論に依拠して「文化リテラシー」に異議を唱えた「批判的リテラシー」論の内容について検討する。

(a) '80年代の教育改革と「文化リテラシー」論

1983年、レーガン大統領一期目の教育長官 T. H. Bell の諮問機関「優れた教育に関する全国審議会 (National Commission on Excellence in Education)」が提出した報告書『危機に立つ国家 (A Nation at Risk)』は、特にハイスクール生徒の深刻な学力低下の実態を指摘するとともに、アメリカの教育に「卓越 (excellence)」を取り戻すことの必要性を提起した (橋爪, 1984, 21-83頁)。この報告書の発刊を契機として生じた教育改革の流れはその後留まるところを知らず、'85年に就任したレーガン二期目の教育長

官 William J. Bennett の時代にも受け継がれる。Bennett は従来からの中等教育の改革に加えて、高等教育の改革をも企図し、高等教育改革に関する報告書を矢継ぎ早に公表した。そのうちの一つ、いわゆる「Bennett 報告」とも呼ばれる『遺産の復権 (Reclaim of A Legacy)』は、特に学部教育における人文科学 (Humanities) の意義を重視し、アメリカの学生に彼らの祖国とその文明の由来を理解させるべく、西欧古典の学習を共通必修とすることを勧告している (今村, 1987, 270-274頁)。

このような流れのなかで、1987年には2冊の教育制度をテーマとした著作、すなわち Allan Bloom の『アメリカン・マインドの終焉 (The Closing of the American Mind)』及び E. D. Hirsch, Jr. の『文化リテラシー (Cultural Literacy)』がベストセラーとなる。まず前者はその副題が「高等教育はいかに民主主義を衰退させ学生の心を貧しくしたか」となっていることからわかるように、アメリカ学生の知的水準の低下を嘆き、大学の一般教養教育カリキュラムの中心に「偉大なる書物 (The Great Books)」つまりは西欧古典の講読を位置づけるべきだと主張する (Bloom, 1987, 邦訳)。また後者は「すべてのアメリカ人が知るべきこと」として西欧の伝統的な歴史や聖書、神話、文学などの文化的な知識の重要性を指摘し、約5,000項目にわたる知識のリストを付録として添付している (Hirsch, 1987, 邦訳)。Hirsch は、この著書のなかで自身の主張を補強する Orlando Patterson (ハーバード大の社会学者) の講演内容を次のように引用している。

工業文明がもたらす文化的・構造的な複雑さの増大により、人々が Hirsch 教授の言う文化常識 (cultural literacy) なるものを幅広く把握する必要が生じている。文化常識とは、主流となっている文化を深く理解することにはかならず、この文化はもはや、白色アングロ・サクソン・プロテスタント (WASP) とあまり関係はなく、工業社会の要請と関係するところが多い。読み書き能力についての論

議でしばしば等閑に付されているのは、まさに文化常識であり、文明全体を包含する深い概念なのである (Ibid., 邦訳, 30頁)。

この引用をもとに Hirsch は、文化リテラシーを身につけることが主流文化の深い理解に繋がり、ひいては社会的・経済的地位の上昇をもたらすと述べている。それ故に黒人をはじめとするマイノリティこそが、この文化リテラシーを獲得すべきだというのである。

(b) Freire の理論と「批判的リテラシー」論

この Bloom や Hirsch の著作が公刊された1987年に、Freire と Donald Macedo は『リテラシー：ことばを読み世界を読む (Literacy: Reading the Word and the World)』を発表する。本書には代表的な批判的リテラシー論者 Henry A. Giroux が「リテラシーと政治的なエンパワーメントの教育学」という長大な序文を寄せ、著者である二人の対話が批判的リテラシー概念の核心を突くものであると述べている (Freire and Macedo, 1987, p. 8)。次に引用するのは「リテラシー再考 (Rethinking Literacy)」と題された対話のなかで、Macedo が文化的な生産や再生産における社会階級の影響について尋ねた問いに対する Freire の応答の一部である。

概して社会の支配層は、自らの特定の関心や嗜好、生活様式について語る時、それらを国民性の具体的な表現と見なしている。したがって従属的な集団は自らの嗜好や生活様式をもっているにもかかわらず、それらを国民性の表現として語るができない。かれらはそのように語るための政治的、経済的な権力を欠いているのである。権力をもつものだけが、自らの集団の特徴を国民文化の代表として一般化し、決定できる。この決定によって、支配集団は必然的に従属集団に属するすべての特徴、及びその決定されたパターンから逸脱した特徴を軽視する (Ibid., p. 52)。

この対話において、Hirsch らの文化リテラ

シー論は直接的には言及されていない。しかしながらこの一節は、主流文化を反映する文化リテラシーの習得がすべてのアメリカ人の課題であるとする Hirsch らの議論を、支配集団と従属集団の権力関係という観点から厳しく批判するものとなっている。

また McLaren (1988) は、Harvard Educational Review に寄せた先の『リテラシー』に対する書評のなかで、アメリカのリテラシー論争における批判的リテラシー論の立場を、以下のよう

文化リテラシーの唱道者が、知的、文化的に衰退の一途をたどっていると考えられているアメリカの若者の「閉ざされた心」をこじ開けるために文学の正典 (a literary canon) を規定する一方で、ラディカルな批評家は数多くのエスノグラフィーの成果に基づいて、リテラシーを支えるジェンダーや人種、社会経済的な背景にわれわれの目を向けさせ、リテラシーの新しい概念化に挑戦している。この挑戦は、現在教育学および大衆文化という2つの領域で展開されており、正統な教育的知識とは何か、そのような知識を定義づける権力をもつのは誰か、その知識をどのような方法で教えるかといったことに関する探究に奮闘している (McLaren, 1988)。

このように批判的リテラシー論は、文化リテラシーが社会のエリート層によって予め規定された規範的な性格を備えたものであり、ある種の「文化的な押しつけ (cultural imposition)」であると主張する。そして本来リテラシーとは、文化リテラシー論者が示すような単一的で固定的なものでは決してなく、ジェンダーや人種、社会経済的な背景等の様々な状況に根ざした多様なものであるということを強調している。

3. 「新しいリテラシー研究 (New Literacy Studies)」の動向

以上のように、'80年代における批判的リテラシーの理論は、Freire の理論に依拠しながら、

様々な社会的背景を基盤とする多様な状況に根ざしたリテラシーを重視していた。先の McLaren の記述にもあるように、すでに'80年代あたりから、この状況に根ざしたリテラシーの実態をエスノグラフィー等の手法を用いて調査することによって、リテラシーに対する単一的・固定的な捉え方を実証的に批判する研究が現れ始め、'90年代には層としてのまとまりを持ち始める。標題に示した「新しいリテラシー研究」はそれら一連の研究の総称であり、英・米の心理学者や社会言語学者、文化人類学者、歴史学者、教育学者らが様々な興味深い成果を発表し続けている。そこで本章では、この「新しいリテラシー研究」の系譜を概観するとともに、その現在の事例として、イギリス・ランカスターグループの「状況に根ざしたリテラシー (situated literacies)」研究を取りあげ、その内容について検討を加える。

(1) 「新しいリテラシー研究」の系譜

「新しいリテラシー研究」に属する諸研究に共通する視点を簡潔に述べるとすれば、リテラシーは、それが使用される社会的、文化的 (あるいは歴史的、政治的、経済的) な実践 (practices) の文脈のなかで研究されることによるのみ意味をもつということである (Gee, 1996, pp. 46-65; Street, 1995, pp. 132-145)。つまり、リテラシーは状況から切り離された個人的な技能ではなく、人々の社会的な相互作用のなかに埋め込まれているものだというのである。このような視点に立つ研究の系譜として、例えば Gee (1996) は、Sylvia Scribner, Michael Cole らの文化心理学的研究や Shirley B. Heath の文化人類学・社会言語学的研究及び Harvey Graff の歴史学的研究などをあげている。ここではこれら4名の研究者の研究内容を概観することで「新しいリテラシー研究」の系譜の一端を辿ってみたい。

まず Scribner と Cole は、リベリアの北西部海岸沿いに暮らすヴァイ族のリテラシーに関する調査研究の結果を報告している。このヴァイ族には、学校教育を受けることなしに獲得され

るヴァイ語、コーランを読むことで獲得されるアラビア語、また学校教育によって獲得される英語の3種類のリテラシーが存在する。ScribnerとColeが行った様々な課題で構成される心理テストでは、全体的に学校教育を受けた人の方が高い成績を示し、ヴァイ語及びアラビア語のリテラシーは学校教育の代用とはならなかったが、ある特定の課題では、ヴァイ語及びアラビア語のリテラシーを持つ人の群が高い成績を示したという。その特定の課題とは、ヴァイ語の場合、ヴァイ族の日常的なリテラシーの実践であるヴァイ語での手紙のやりとりに関わる「音節の統合」であり、アラビア語の場合はコーランの読み書きの修得法と関わる「増量再生」であった。これらの課題は、いずれもヴァイ族の人々の学校外の日常生活における社会的実践と密接に関連していたのである(Cole, 1996, 邦訳, 314-326頁)。

またHeath (1983) は、アメリカ・ピードモント・カロライナにある3つのコミュニティの文化的な状況に埋め込まれたリテラシーの様式を、9年間にわたる参与観察に基づいて記録・考察している。本研究では、上の3つのコミュニティ、すなわち織物工場の生活を四世代にわたって続けてきた家族が暮らす白人労働者階級の街・Roadvilleと、かつての世代は農業を営んでいたが現在は工場で働く黒人労働者階級の街・Trackton、及び主流の中産階級の黒人や白人が暮らす都心の街の、それぞれの地区における言語によるコミュニケーションのあり方や子どもの言語習得のプロセスが詳細に記述され、比較されている。例えばRoadvilleでは、読むことが賞賛されるべき理想の行為であるため、子どもには幼い頃からおとぎ話を読み聞かせながら読み方を教えるし、子どものために、または自分自身のために様々な読み物をとっておく。一方Tracktonでは、読むことが主として口頭でのコミュニケーションのための手段であり、一人で読むという行為は「反社会的 (anti-social)」であるとされる。つまり読むときは集団のなかで声を出して読み、それをもとに会話を楽しむのである。したがってRoadvilleのように読み

物をとっておくという習慣もないし、子どもたちに読み方を教えるということもない。また主流中産階級の人々 (townspeople) は自分の読んだ内容を他人と共有することはまずなく、RoadvilleやTracktonの人々に比べて経験を脱文脈化 (decontextualize) できるという (Heath, 1983, pp. 190-262)。このHeathの研究は、話しことばやリテラシーの機能が使用される地域の状況に応じて多様であり、当該地域の歴史や文化、居住者の人種・階級構成等の複雑な環境要因に影響を受けていることを、事例の緻密な描写によって具体的に示唆している。

次いで「リテラシーは社会経済的な発展や個人の進歩をもたらす」という社会通念を「リテラシーの神話 (literacy myth)」と命名し、その一面的な捉え方を社会史の手法によって実証的に批判したのが、Graffである。Graff (1987) は、ヨーロッパや北米で16~20世紀にかけて行われた人口調査の記録や遺言状、各種の証書・契約書や結婚登録簿に残された署名等の膨大な資料を駆使することによって、識字率と経済発展の関係やリテラシーが使用されていた具体的な状況 (リテラシーがいつ、どこで、どのように、なぜ、誰に対して伝えられたのか)、さらには庶民のリテラシーに対する意味づけなどに関する分析を行っている。例えば識字率と経済発展の関係に関する「神話」を覆す事例として、Graffは16世紀以降のヨーロッパ諸国における宗教改革と識字率の関心に焦点を当てている。特に17世紀のスウェーデンでは、ルター派の強力な識字運動が展開されたために、制度的な学校教育に依ることなく極めて高い識字率が達成されていた。1686年の教会法には「子どもや農民やメイドは、読むことを学び、自らの目で神が命じるその聖なることばを見なければならない」といった規定があり、教会主導のキャンペーンが強力に展開されたことを物語っている。実際、このキャンペーンにおいては教会による試験システムが確立され、教理問答集を読む能力が定期的にテストされていたという。そのため個々の家庭では、親が子どもに聖書によって文字の読み書きを教えるという重要な責任を

負っていたのである。以上のように、スウェーデンでは宗教的な動機に基づいて識字率の向上が実現したが、Graffによれば、当時の社会の貧困状況に大きな変化はなかったという。つまり、経済の発展によって識字率が向上したわけでもなく、また識字率の向上が経済の発展を刺激するということが起こらなかったのである (Graff, 1987, pp. 137-172)。

以上、'80年代に発表された Scribner と Cole, Heath, Graff の諸研究を概観してきたが、いずれの研究も、そのディシプリンに違いはあれ、状況に根ざした多面的な性質をもつリテラシーの実態を実証的なデータによって明らかにすることで、リテラシーに関する一面的・固定的な捉え方に異議を唱えている。

(2) イギリス・ランカスターグループの「状況に根ざしたリテラシー (situated literacies)」研究

本節で取り上げるイギリス・ランカスターグループの「状況に根ざしたリテラシー」研究は、上に述べた「新しいリテラシー研究」の系譜でいえば、Heathが行ったような文化人類学・社会言語学的な研究の流れを汲むものである。この「リテラシー」の語に使用されている複数形の“literacies”は、個別具体的で様々な状況に根ざしたリテラシーの多様性を象徴している。またこの研究の主体である「ランカスターグループ (Lancaster Group)」とは、ランカスター大学の研究者を中心とするリテラシーの研究グループであり、主として人類学者や言語学者、教育学者らで構成されている (Barton, Hamilton and Ivanic, 2000)。ここではこのランカスターグループの中心メンバーで、特に'90年代以降、数多くの研究成果を発表し続けている David Barton 及び Mary Hamilton の「ローカル・リテラシー (local literacies)」研究の内容を検討する (Barton and Hamilton, 1998)。

(a) 「ローカル・リテラシー」研究の基本概念—「リテラシー実践 (literacy practices)」と「リテラシー活動 (literacy events)」

「ローカル・リテラシー」とは、端的に言えば、ある特定の時代、ある特定の地域、ある特定の状況で用いられているリテラシーのことを指している。したがって本研究において Barton と Hamilton は、その対象を1990年代という時代、及びランカスター地区という地域に限定し、そこで用いられているリテラシーの実態を明らかにするべくフィールドワークを行っている。ここではまず、このようなローカル・リテラシー研究の前提となる概念である「リテラシー実践」と「リテラシー活動」の内容を概観しておきたい。

まず前者の「リテラシー実践」とは「人々が生活のなかで扱う書かれた言語の使い方、特にその文化的な様式 (cultural ways) (Ibid., p. 6)」であるとされている。ここでいう「実践 (practice)」とは、観察可能な行動を意味するのではなく、そのような行動を生み出す価値観や態度、感情や社会関係などの要素を含んだ、より抽象的なものを指している。つまり人々のリテラシーに対する認識や解釈、リテラシーに関する談話 (discourses)、すなわち人々がリテラシーについてどのように語り、どのような意味づけを行っているかということをも含んだ内容を指しているのである。したがってこのようなリテラシー実践は、個人に内在するものであると同時に、ある特定の集団やコミュニティにおける人間関係のなかに存在するものと捉えられる。他方、後者の「リテラシー活動」とは「リテラシー実践から生じ、リテラシー実践によって形成される観察可能な挿話的できごと (episodes) (Ibid., p. 7)」であるとされる。つまりそれは、リテラシーが何らかの役割を果たしている観察可能な行動のことを指している。多くの場合、このようなリテラシー活動の中心には書かれたもの、すなわちテキストがあり、そのテキストに関わる会話が行われているという。このリテラシー活動の具体例として、以下に「料理のリテラシー (cooking literacy)」の内容の一部を引用する。

台所でレモンパイを焼くとき、Rita はレシ

ピにしたがう。彼女はそれで材料の分量をチェックする。彼女は目的にかなったティーカップやスプーンを使って適当な量を判断する。このレシピは一枚のメモ用紙に手書きされている。それは10年以上も前に友人に借りた本から抜き書きしたものである。…このメモ用紙は、料理をしているときに何度も使われてきたので、たくさんのしるしが付けられ、油で汚れている。…Ritaはパイを作るとき、いつも同じ活動を行うわけではない。より多くの人がパイを食べるときは、レシピに書いてある量の2倍を使って作ることもあるし、娘のHayleyを助けながら一緒に作ることもある。…Ritaはそのレシピを、パイの好きな何人かの友人に渡したこともある (Ibid., p. 8)。

ここでは「たくさんのしるしが付けられ、油で汚れた手書きのレシピ」がテキストであり、このテキストをめぐってRitaの様々なリテラシー活動が展開されているのである。したがってローカル・リテラシーの研究においては、このような日常生活における具体的なリテラシー活動を詳細に分析することによって、それらに関わる人々のリテラシー実践を明らかにしていくことが主要な目的とされる (Ibid., p. 8)。

(b) 日常生活におけるリテラシー実践の内容

以上のような基本概念に基づいて、BartonとHamiltonはランカスター地区において長期間にわたるフィールドワークを実施する。この地区はかつては典型的な工場の街であったが、調査実施当時には多くの工場が閉鎖され、その跡地が住宅や駐車場に変わるといった状況にあった。また工場の衰退に伴って、地域の産業が教育や医療・保健等のサービス産業に取って代わられていた。地区住民の多くが白人で労働者階級に属しており、小規模なマイノリティグループとしてポーランド語を話すカトリック教徒やグジャラート語を話すイスラム教徒が居住している (Ibid., pp. 36-39)。本調査においては、地区の成人大学 (The Adult College Lancaster) ・成人基礎教育コースの受講生20名に対するイン

タビューや地区内の一地域に暮らす人々をランダムに戸別訪問してのインタビュー (65名)、及び様々なリテラシー活動の様子を示す写真の撮影や文書類の収集などを含む参与観察等が行われ、これらの作業を通してランカスター地区に暮らす人々の日常生活におけるリテラシー活動の諸相が記録・分析されるとともに、その背後にあるリテラシー実践の内容が明らかにされている (Ibid., pp. 57-73)。ここでそのプロセスの詳細について触れることはできないが、分析結果の概要を提示することによって、その内容が意味するものについて考察を加えてみたい。

Barton及びHamiltonは、ランカスター地区におけるフィールドワークの結果から、地区住民の日常生活におけるリテラシー実践を“vernacular literacy practices (日常語のリテラシー実践)”と名付けて、教育や法律、宗教、職業等の公的な社会組織・制度に関わる“dominant literacy practices”と区別し、その内容を①生活の組織化、②対人コミュニケーション、③私的な娯楽、④生活の記録、⑤意味の了解、⑥社会参加の6点に整理している。以下それぞれの内容について、調査で明らかになった具体例を交えながら説明を加える (Ibid., pp. 247-262)。

①生活の組織化 (organizing life)

ここでいう「生活の組織化」とは、生活の管理を意味している。人々は日々の生活を管理するために、カレンダーや手帳、住所録や電話番号リストを使う。また家庭には手紙やペン、メモ用紙を置いておく場所があるし、複雑な家計の記録を残すための家計簿もある。さらに買い物ややるべきことのリストといった簡単な手書きのメモも、日々の生活には必要不可欠である。つまりこのような活動の多くは、日常生活においてリテラシーが関わる雑事であるが、生活の管理という観点から見れば、極めて重要な役割を果たしている。

②対人コミュニケーション (personal communication)

このリテラシー実践における代表的な活動は、親戚や友人に対して手紙やカードを送るということである。その目的は、家族のニュースを知

らせること、関係を築くもしくは断つこと、あるいは招待や感謝の意を示すことなど極めて多様である。さらに手紙やカードだけでなく、人々は互いに様々な種類のメモを残す。買い物や食事についてのメモを台所に置いたり、親愛の情や怒りの感情を伝えるためのメモを他人の家のドアに挟み込んでおくといったこともよく行われる。このように対人コミュニケーションは様々な形態や目的をもっているため、そこで使用されるリテラシーも同様に幅広く、多岐にわたるものとなる。

③私的な娯楽 (private leisure)

このリテラシー実践では、本や雑誌、新聞を読むという活動が重要な要素となっている。人々は、くつろぎや暇つぶしなどの娯楽のために本や新聞を読む。子どもも大人も、本を読んで我を忘れる (be lost in a book) ことができる。このような読書は独りのときにする場合が多いが、独りになるためにする場合もある。また読むことだけでなく書くことも私的な娯楽の一つである。特に多くの人々が、詩を書くことを娯楽の活動として報告していたことは注目に値する。

④生活の記録 (documenting life)

この実践では、例えば出生証明書や学校のレポートなどの文書を残したり、写真を撮ってアルバムやスクラップブックを作るといった活動があげられている。また人生の様々な場面で日記を書き始め、場合によっては一冊の自叙伝を完成する人もいた。70歳の方が自身のライフストーリーを書き始め、それが自らの人生を振り返るというプロセスにつながることもある。さらに自分の家族や近隣地域の歴史を研究する人もいることを考えると、日常生活のリテラシーにおける生活の記録という側面は、個人やその家族、またより広いコミュニティにとっても重要であることがわかる。

⑤意味の了解 (sense making)

「意味の了解」とは、未知のテーマについて自分自身で調査・研究を進め、その内容を理解していくということである。最も簡単な例としては、家電製品の使い方や効果的な修理法を理

解するために使用説明書や保証書を読むことなどが挙げられる。インタビューの対象者のなかには、ある特定のテーマ、例えば病気や子どもの問題、法律に関する苦情などについての地域の専門家 (local experts) となっている人もいた。彼・彼女らはアマチュアでありながら、医療や教育、法律などに関する専門職の領域に侵入し、自身の問題や身近な他者が抱える問題の解決に向けて、積極的に地域活動を行っている。

⑥社会参加 (social participation)

ランカスター地区には大小様々な団体やクラブが多数あり、地区内の多くの人々がそれらの組織に関係している。このような組織への参加には様々な形態のリテラシーが関わってくる。人々は掲示や会報を読み、それらに寄稿し、会議や慈善バザーに参加し、ポスターをデザインするのである。また地方の政治活動への参加にもリテラシーは重要な役割を果たす。実際、多くの人々が請願書に署名し、公開会議に参加し、手紙を書いたり、行進やデモに加わっている。このような社会参加の活動において、リテラシーは変化を促す力をもつ道具として使われ、実際に変化をもたらしているのである。

以上、Barton 及び Hamilton のローカル・リテラシー研究を概観してきたが、これらの研究は、ある特定の時間、空間に限定された日常生活におけるリテラシー実践を詳細に分析することによって、リテラシーの状況に根ざした多様な機能、すなわち個人の生活や内面の変化に果たす役割、及びコミュニケーションや社会参加等の社会的な相互作用に果たす役割を具体的に描写することに成功している。

4. 批判的リテラシー研究の意義

先にも述べたとおり、Paulo Freire の識字教育論に端を発する批判的リテラシーの研究が一貫して追究してきたのは、'80年代アメリカの文化リテラシー論者が主張したような一面的で固定的なリテラシーではなく、様々な状況に根ざした多様なリテラシーの重要性であった。さらに'80~'90年代の「新しいリテラシー研究」においては、そのような多様な状況に根ざしたり

テラシーの実態が実証的なデータに基づいて具体的に提示され、リテラシーの持つ機能の多面性、豊かさを示唆するに至っている。手帳や家計簿を用いた生活の管理、手紙やカードによる日常のコミュニケーションに加えて、読書や詩作等の個人的な娯楽、アルバム作りや自叙伝執筆等の生活の記録、また場合によっては未知のテーマに関する専門的な探究や地域組織、政治活動への参加等、人々が日常の社会生活を営む様々な場面において、リテラシーは極めて重要な役割を果たしているのである。このことは、リテラシーが人々の相互行為、すなわち社会的実践のなかに埋め込まれた動的なものであることを具体的に示している。

以上のようなリテラシーの捉え方は、近年例えばアメリカにおける成人識字教育の方法研究にも影響を与えつつある。具体的にはハーバード大学内に設置されている国立成人学習・識字研究センター (National Center for the Study of Adult Learning and Literacy) の研究グループが、「成人学習者のリテラシー実践研究 (The Literacy Practices of Adult Learners Study)」と題して5年間の継続研究を行い、全米22州における83の成人識字教室・173名の学習者を対象とする調査に基づいて、学習者の教室外の日常生活に根ざした成人識字教育のあり方を検討している (Jacobson, Degener and Purcell-Gates, 2003)。この研究においては、効果的な識字教育を提供している教室の活動が「学習者の状況に根ざした (learner-contextualized)」ものであるということ、またそのような教室では「現実生活の目的 (real life purposes)」のために「現実生活のテキスト (real life texts)」が使用されているということが明らかにされている。そして学習者の「現実生活の目的」や「現実生活のテキスト」の内容を探るための方法として、先に示した Barton 及び Hamilton の「リテラシー活動・実践」の概念を援用しながら、学習者が直近の一週間に行ったりテラシー活動の内容を尋ねる50の質問例を提示している (Ibid., pp. 21-25)。

このような学習者の状況に根ざした活動は、

すでに日本の成人識字教育においても重要視されてきたものである。実際、被差別部落の識字学級をはじめとする識字教育の現場では、学習者の日常生活に密着したことをばを使って文字の学習が進められるとともに、学習者自身の経験や生活史を「綴る」という作業が重視されてきたのである (岩槻, 1998)。したがって本稿が検討してきた近年の批判的リテラシー研究、とりわけ「新しいリテラシー研究」は、このような日本の識字教育の方法研究に対しても重要な示唆を与えてくれるであろう。すなわち、日本においてもまた、学習者の日常生活に埋め込まれた「ローカル」なりテラシー活動・実践を丹念に掘り起こすことによって、それらを学習の資源に転化していく具体的な方法を検討することが求められるのである。

〈引用文献〉

- Barton, D. and Hamilton, M. 1998 *Local Literacies: Reading and Writing in One Community*. London, Routledge.
- Barton, D., Hamilton, M. and Ivanic, R. (Eds) 2000 *Situated Literacies: Reading and Writing in Context*. New York, Routledge.
- Bloom, A. 1987 *The Closing of the American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*. New York, Simon & Schuster Inc. 菅野盾樹 (訳) 『アメリカン・マインドの終焉—文化と教育の危機』, みすず書房 (1988).
- Cole, M. 1996 *Cultural Psychology: A Once and Future Discipline*. Cambridge and London, The Belknap Press of Harvard University Press. 天野清 (訳) 『文化心理学—発達・認知・活動への文化・歴史的アプローチ』, 新曜社 (2002).
- Freire, P. 1970a *Pedagogia do Oprimido*. 小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周 (訳) 『被抑圧者の教育学』, 亜紀書房 (1979).
- Freire, P. 1970b *Cultural Action for Freedom*. 柿沼秀雄 (訳) 『自由のための文化行動』, 亜紀書房 (1984).
- Freire, P. and Macedo, D. 1987 *Literacy: Reading the Word and the World*. New York, Bergin & Garvey.
- Gee, J. P. 1996 *Social Linguistics and Literacies: Ideology in Discourses*. (2nd edn) London, Falmer Press.
- Giroux, H. 1987 *Literacy and the Pedagogy of*

- Political Empowerment, in Freire, P. and Macedo, D., *Literacy: Reading the Word and the World*. New York, Bergin & Garvey.
- Graff, H. J. 1987 *The Legacies of Literacy: Continuities and Contradictions in Western Culture and Society*. Indiana University Press.
- 橋爪貞雄 1984 危機に立つ国家—日本教育への挑戦, 黎明書房.
- Heath, S. B. 1983 *Ways with Words: Language, Life, and Work in Communities and Classrooms*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hirsch, E. D., Jr. 1987 *Cultural Literacy: What Every American Needs to Know*. New York, Houghton Mifflin Company. 中村保男 (訳) 『教養が国をつくる—アメリカ建て直し教育論』, TBSブリタニカ (1989).
- 今村礼子 1987 教育は「国家」を救えるか—質・均等・選択の自由, 東信堂.
- 岩槻知也 1998 識字教育における方法の体系化に関する予備的考察, 大阪大学人間科学部紀要第24号.
- Jacobson, E., Degener, S. and Purcell-Gates, V. 2003 *Creating Authentic Materials and Activities for the Adult Literacy Classroom*. National Center for the Study of Adult Learning and Literacy.
- 国立教育政策研究所 2002 生きるための知識と技能—OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2000年調査国際結果報告書, ぎょうせい.
- 国立教育政策研究所 2004 生きるための知識と技能—OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003年調査国際結果報告書, ぎょうせい.
- Lankshear, C. and McLaren, P. L. (eds) 1993 *Critical Literacy: Politics, Praxis, and the Postmodern*. New York, State University of New York Press.
- McLaren, P. L. 1988 Culture or Canon? Critical Pedagogy and the Politics of Literacy. *Harvard Educational Review*, Vol. 58 No. 2.
- 日本教育学会 2003 教育学研究 第70巻第3号
- 日本教育学会 2003 教育学研究 第70巻第4号
- Street, B. 1995 *Social Literacies: Critical Approaches to Literacy in Development, Ethnography and Education*. London, Longman.